

平成25年度第1回入学試験問題

国語

「始め」の合図があるまでは問題を開いてはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから7ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎカッコ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字はていねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

一次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

おじさんの住んでいたアパートを一度だけ訪ねたことがある。中学三年生の秋だった。おふくろがしまつていた年賀状から住所を書き写して、学校帰りにバスに乗って向かった。

その頃、僕は学校で友だちからつまはじきにされていた。話をせず、目も合わさず、ここにいないのに「アツカウー」——そんないじめを受けていたのだ。

発端は友だちとの口ゲンカだった。冗談のつもりでからかった言葉を、相手が真に受けて食ってかかった。その場はなんとかおさまったが、まわりにいた友だちはみんな僕のほうが悪いと思っていたらしく、僕が立ち去ったあとで、ケンカの相手を中心に僕の悪口を言いつつた。それが無視のいじめになって、クラスの男子や他のクラスの男子にまで広がった。

僕は自分が思うほど友だちみんなに好かれていたわけではなかった。そしてみんなにとっても、部活動から引退して、高校受験のプレッシャーがじわじわと迫っている時期、もともと気にくわなかった誰かを苦しめるのは、恰好のストレス解消法でもあったのだろう。

キツかった。食欲がなくなり、受験勉強が進まなくなつて、口のまわりに膿んだ吹き出物がいくつもできた。布団に入ってもなかなか寝つかれず、朝起きると吐き気がした。

いじめのことは誰にも打ち明けなかったが、クラス担任の教師が気づいた。僕に直接尋ねるのではなく、学校でも元気がないのだが、家では変わった様子はないか、とおふくろに訊いた。おふくろもおふくろで、僕にはなく教師に、元気がないというのは具体的にどういふことなのかを訊いた。

友達の輪からぼつと離れていることが多い、授業中に僕が当てられると冷ややかにそっぽを向く生徒が何人もいる、掲示板に貼ってある給食当番表の僕の名前に画鋲が刺してある……。

おふくろは当然のように親父に相談した。親父は僕を居間に呼んで、「言いとうないんじやったら、なんも言わんでええけん」と最初に言った。「ヒロシの担任の先生も、どうもいけんのう」とも言ってくれた。そして、教えるサトすようなゆつくりとした口調で、僕を励ましてくれたのだ。

いじめをするようなつまらない連中なんか相手にするな、いまおまえにとって大事なものはなんだ？勉強だろう？ いまはしっかりと勉強しろ、おまえが胸を張って堂々と学校に通っていれば、あいつらだつて自分の情けなさに気がつくから……。

1 親父は正しい。僕も親父の正しさに付き合つて、そうだね、がんばるから、と笑った。

おじさんを訪ねたのは、その翌日だった。

アパートは駅の近くにあった。小さな飲み屋が並ぶ通りを抜けて、風俗店の看板がようやく途切れたあたりで裏通りに折れると、木造モルタルの古いアパートが窮屈そうに建ち並ぶ一角がある。おじさんのアパートは、中でも特に古びた一軒だった。

あの頃おじさんはどんな仕事をしていたのだろう。平日の夕方なのに部屋にいた。ジャンパーを羽織った姿で玄関に出て、「おう、どげんしたんか」と少しびつくりして笑った。息が酒臭い。昼間から飲んでいたのかもしれない。「ちよつと遊びに来ただけ」と僕が言うと、A 怪訝そうな顔のまま「メシを食いに行くところじやたんよ」とサンダルをつっかけて外に出た。

「ヒロシも腹減つとるじやろ」

「うん……まあ」

カバンの中には給食の食べ残しのパンが入っていた。誰かに破かれてしまったプリントも一緒に。「食いに行くか、おじちゃんかうまいもん食わせちやる」

後ろ手にドアを開けて歩きだすおじさんを、あわてて追いかけた。部屋の中からはテレビの音が聞こえ、ほかに誰かいる気配もあったが、おじさんはなにも言わず、ただ黙って歩くだけだった。

なにをしたくておじさんを訪ねたのか、自分でもわからない。おじさんに何を言つてほしかったのだろう。なにをしてほしかったのだろう。もしかしたら、アパートまで行つてみたけれど留守だった、というのを期待していたのかもしれない。その期待がなんのためか、よくわからないのだが。

飲み屋街の角を何度曲がった。おじさんに声をかけてくるひとが何人もいた。怖そうな男のひとや女のひとばかりだった。「こげなところ歩くんは初めてじやろ」と僕を振り向いたおじさんは、「なに泣きそうな顔してるんな」とおかしそうに笑った。そんな顔だったはずはないのに、おじさんにそう言われると、2 ほんとうに泣きそうになつてしまった。おじさんは足を止めて「お父ちゃんやお母ちゃんに言うて来とるんか？」と訊いた。僕が黙って首を横に振ると「ほうか……」とうなずいて、また歩きだして、もうそのあとは振り向かなかった。

暖簾越しに「めし」「酒」と染め抜かれた大衆食堂に入った。テーブルに鉄板がはめ込まれて、壁に貼られたメニューの短冊には、お好み焼きやホルモン焼きもあった。何人かいた先客にネクタイを締め、たひとはいない。みんな酒を飲んでた。煙草の煙が店の中にたちこめて、割烹着姿のおかみさんも交えた話し声や笑い声は、怒鳴り合っているんじゃないかと思うほど大きかった。

おじさんはコップ酒とホルモン焼きを注文して、僕にカツカレーを頼んでくれた。最初に「ライスカレールーくれや」とおかみさんに言ったあとで、「どうせじやたらカツも載せてもらうか」と付け加えたから、おじさんなりに僕をもてなしてくれたのだろう。

食欲のなさを割り引いても、カツカレーはひどい味だった。カレーはともかく、トンカツは衣が油くさく、薄つぺらで、肉も筋張つて硬かった。それでもしかたなく、ウスターソースをどぼぼかけて、皿に顔を突っ込むようにして食べていった。

おじさんは火の通つたホルモンをときどき僕のカレー皿に入れてくれた。一度だけ「カレー、うめえか」と訊いて、「うん」と僕が言うと、「なんぼでも食えや、お代わりしてもええ」と笑つて、それだけだった。コップ酒を啜つて、カウンターに置いてあったテレビのクイズ番組をぼんやり観て、くちやくちやと音を立ててホルモンを食べて、先客のおしゃべりに割つて入って、苦笑いとうつとうしような顔で話から追い払われて、酒のお代わりをして、煙草を吸つて、歯の間にはさまったホルモンの筋を指でかき出して、それだけだった。油やソースの染みが散つたスポーツ新聞を読み、ひいきの広島カープのベテラン選手が自由契約になったことにぶつつか文句をつけ、一人でカウンターに移つておかみさん相手に競艇の話を始め、おかみさんが声をひそめて誰かのことを話しかけたら、「どげんでもええわい」と吐き捨てるようにさえぎり、「煮るなり焼くなり好きにせえ言うといてくれえ」と酒を呷つて、牛スジのおでんを大鍋から二本取り、そのうち一本を僕に渡して、「カラシをぎょうさん付けて食えよ」と言つて、I のだ、ほんとうに。

僕がカツカレーを食べ終わつた頃、おじさんはやつとテーブルに戻ってきた。

「ヒロシ、食うたか」

「……うん」

「よつしや」

大きくうなずいたおじさんは、椅子に腰かける間もなくカウンターを振り向き、「勘定してくれえ」と言つた。店を出ると「ここをまっすぐ行つて、二本目の角を左に曲がったら駅じゃけん」と通りの先を指差して、その指を通りの反対側に向けて「おじちゃん、これからパチンコで大勝負じゃ」と笑つて、一人でさつさと歩きだして、それっきりだった。

なにも言ってくれなかったし、なにもしてくれなかった。いつものホラ話もなかったし、そもそも僕がなぜ訪ねてきたかさえ、一度も訊こうとしなかった。

がっかりするよりも、あきれて、おじさんに背を向けて歩きだしながら笑った。口の中にはトンカツの油がまだしつこく残っていたが、実際に食べているときにはどうしようもなかったカレーの味は、思っていたよりも、あれも意外とうまかったんじゃないかという気がしてきた。

無視のいじめはその後もしばらくつづいたが、やがて、なんとなく、なしくずしにグループから脱落する奴らが増えてきた。僕を最後まで無視しつづけていたのは五、六人で、その連中とは高校が別々だったのだ、卒業と同時にいじめは終わった。

おじさんはそれから何度も家が訪ねてきたが、あの日のことを蒸し返したりはしなかった。僕もなにげともなかったかのようにおじさんを迎え、ホラ話に笑った。

おじさんはまだ覚えていたのだろうか。「そげなことあったかのう」と真顔でB首をひねるかもしれない。そのほうがおじさんらしい。

僕はあの日おじさんになにかを教わったのだろうか。おじさんに救われたのだろうか。

3 ただ、いつか恩返しをしなくちゃな、とは思っていた。

（重松清「ホラ吹きおじさん」より）

問1 — 線a・bのカタカナを漢字に直しなさい。

問2 — 線A「怪訝そう」・B「首をひねる」の説明として最もふさわしいものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|---------------|---|-------------------|
| A | ア 不満そうさま。 | B | ア 疑問に思っただけさま。 |
| | イ 悲しそうさま。 | | イ 奇妙なことだと怪しむさま。 |
| | ウ いらいだっているさま。 | | ウ 感心して記憶をさぐるさま。 |
| | エ 納得がいけないさま。 | | エ 必死にこまかそうとするさま。 |
| | オ 突然で驚いているさま。 | | オ わけが分からず困っているさま。 |

問3 — 線1「親父は正しい」とありますが、「僕」は父親のどのような点を「正しい」と思ったのですか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 今の「僕」の態度が間違っていないと応援してくれた点。
- イ 「僕」の立場になって担任や友人を冷静に批判してくれた点。
- ウ 落ち込む「僕」の心情に寄りそうように優しく励ましてくれた点。
- エ いじめられている「僕」がこれからとるべき姿勢を示してくれた点。
- オ 学校でのいじめを察して積極的に「僕」の話に耳を傾けてくれた点。

問4 — 線2「ほんとうに泣きそうになってしまった」とありますが、それはなぜですか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア おじさんの言葉が、おじさんへの信頼をより強くさせたから。
- イ 本心を見抜いたおじさんの、人間味あふれる言葉に感動したから。
- ウ びくびくしながら歩いている様子を、おじさんからかわれたから。
- エ おじさんの何気ない一言が心に響き、抑えられていた感情があふれたから。
- オ 普段はだらしのないおじさんの細やかな気づかいに、心を揺さぶられたから。

問5 — Iにあてはまる最もふさわしいことばを、同じ段落から探して書き抜きなさい。

問6 「僕」が悩みから一歩抜け出したことがわかる段落を探し、その最初の七字を書き抜きなさい。

問7 — 線3「ただ、いつか恩返しをしなくちゃな、とは思っていた」とありますが、「僕」はおじさんのどのような態度に恩を感じたのですか。父親との違いを明らかにして、解答欄にあてはまるように二十五字以上三十字以内で答えなさい。

二次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

日本人は昔から、外国の文物を模倣（まね）し、摂取する能力に長けた民族である。しかし、文字に限って言えば、古代ヤマト民族は、長いあいだ文字文化を摂取しなかった。当時、東アジアで文字と言えば漢字しかなかったから、漢字文化を摂取しなかった、と言い換えてもよい。

これは、文字を学ぶ能力がなかった、というより、1 意図的に文字を学ばなかった可能性がある。筆者が思うに、古代ヤマト民族の「言霊思想」が、文字文化の輸入を阻んだのではない。

そもそも、和語（＝日本固有のことば）では、「A」と「B」を区別せず、ともにコトと言った。すべての言葉には霊力があり、ある言葉を口にすると、実際にそういう事件が起きる、と古代人は信じた。例えば「死ぬ」という言葉を口にすると本当に「死」という事実が起きるし、自分の本名を他人に知られると霊的に支配されてしまう、と恐れられていた。

このような迷信を、言霊思想という。

八世紀の『万葉集』（＝日本最古の和歌集）の歌人たちは、和歌のなかで、日本を「言霊の幸はう国」「事霊のたすくる国」と詠んだ。こうした自覚は、弥生時代のヤマト民族にもあったであろう。

そんな言霊思想をもつ古代ヤマト民族にとって、異国から伝来した文字は、まるで、2 言霊を封じ込める魔法のように見えたにちがいない。幕末に西洋から写真技術が入ってきたときも、「写真に撮られると魂を抜かれる」という迷信を信じた日本人は、多かった。何千里も遠く離れた人や、数百年も前に死んだ人のメッセージも正確に伝える文字というものに対して、古代ヤマト民族が警戒心を懐いたとしても、不思議はない。

古代のヤマト民族の社会は、文字がなくてもやってゆけたろう。先祖の事件や物語は、記憶のブロである語り部が暗誦すれば事足りた。稲束の量を記録する場合は、縄の結び目を使う「結縄」で間にあった。中国や朝鮮半島との「オウライ」には、漢字が必要となったかもしれないが、それは少数のスペシ

ヤリストの仕事であり、民衆の日常生活とは関係がなかったはずである。

文字記録に対する抑制、という現象は、どの民族にもあった。

例えば、古代インドでも、崇高な教えは文字として記録してはいけない、という社会的習慣があった。釈迦の教えも、弟子たちはこれを文字に記録せず、口から口へと伝えた。西洋でも、崇高なものは文字に写してはいけない、という発想があった。八百万の神を信仰していた古代ヤマト民族にとっては、森羅万象（「すべてのもの」）が、宗教的な意味をもっていた。こうした世界観が、漢字漢文の日本への定着を阻む要因となっていた可能性がある。

中島敦の短編小説『文字禍』は、古代人の文字観を描いた傑作である。作者は、前七世紀のアッシリアの老博士の口吻（「話し」）に託して、文字の「言霊」の害悪を述べる。

「獅子という字は、本物の獅子の影ではないのか。それで、獅子という字を覚えた獅師は、本物の獅子の代りに獅子の影を狙い……」

「書浅らし？ 冗談ではない、書かれなかった事は、無かった事じゃ。芽の出ぬ種子は、結局初めから無かったのじゃわい。3 歴史とはな、この粘土板のことじゃ」

「此の文字の精霊の力程恐ろしいものは無い。君やわしらが、文字を使って書きものをしとるなどと思ったら大間違い。わしらがこそ彼等文字の精霊にこそ使われる下僕じゃ」

中島の作品はフィクションだが、文字文化がもつ落とし穴を、よく描いている。古代ヤマト民族も、「文字の精霊にこそ使われる下僕」になる危険性を本能的に嗅ぎとり、漢字文化の摂取を躊躇した（「ためらった」）のかもしれない。

古代エジプトでは、墓室のなかに墓誌（「死者の業績」）を書いた。古代中国でも、墓誌は、それだけで文学の一ジャンルをなすほど盛んだった。

ところが古代ヤマト民族は、墓誌を嫌った。弥生時代の甕棺から漢字を鋳込んだ鏡は出土しても、被葬者（「墓に埋められた人」）の名前を漢字で書いた甕棺は出てこない。三世紀半ばから古墳が**ソウエ**イされるようになったが、古墳の墓室内に被葬者の名前や事跡を文字で書き記すことはなかった。

五世紀の日本（当時はまだ「倭国」と呼ばれていた）には、すでに高度な漢文を書く能力をもつ書記官が存在していた。例えば、いわゆる「倭の五王」が中国の南朝に派遣した使者は、中国の皇帝に、堂々たる純正漢文の上奏文（「皇帝に差し上げる文」）を渡している。五世紀当時の倭国の大王は、その気になれば、古墳の被葬者の名前を、墓誌なり石碑なりで明示することは簡単だったはずだ。古代の天皇陵の大半は過去に盗掘に遭い、副葬品がもち出されたが、墓誌が見つかったという記録は残っていない。

日本では、たった千五百年前の古墳でさえ、その被葬者を確定できない。対照的に、エジプトでは、四千年前の陵でも、ちゃんと被葬者の名前がわかる。墓のなかにびっしりと、ヒエログリフ（エジプトの象形文字）で文字が書いてあるからである。もともと、古代エジプト人も、迷信のせいで、ずいぶん神経を使った。墓室内にヒエログリフを書く場合、猛獣をあらわす文字は二つに断ち切って書く、という妙な風習もあった。これは、ヒエログリフで描かれた猛獣の「言霊」が文字から抜け出して、遺体に害をなすことを避けるための呪法であつたらしい。

三世紀の邪馬台国の所在が今日も不明なもの、その場所が示されていないからだ。すでにその候補地となる遺跡はいくつも発見されているのだが、「ここが邪馬台国です」とか「ここが卑弥呼の墓です」と文字で書いた遺物なり碑文が出土する可能性は、今後も期待できない。

もし、単に漢字の字形をまねることをもって漢字の受容と見なすのであれば、日本人は、弥生時代から文字時代に入った、と言うことができる。ただ、日本人自身が、自分たちの事跡を漢字で記録することにはなかった。その意味で、**C** と言える。

（加藤徹『漢文の素養』より。一部省略）

問1 線 a・b のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 線1「意図的に文字を学ばなかった可能性がある」とありますが、なぜこのように筆者は考えているのですか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 古代ヤマト民族の人々は、墓に文字を残さなかったから。

イ 古代ヤマト民族の人々は、文字に支配されると思っていたから。

ウ 古代ヤマト民族の社会には、漢文を書く能力の高い人間がいたから。

エ 古代ヤマト民族の人々は、文字に魂が吸い取られると信じていたから。

オ 古代ヤマト民族の社会には、文字に代わるものがすでに存在していたから。

問3 **A**・**B** にあてはまる最もふさわしいことばを、それぞれ答えなさい。

問4 線2「言霊を封じ込める魔法のように見えたにちがいない」とありますが、文字のどのような点が「魔法」のように見えたのですか。解答欄にあてはまるように五字以内で答えなさい。

問5 線3「歴史とはな、この粘土板のことじゃ」とありますが、これはどういうことですか。解答欄にあてはまるように六字以内で答えなさい。

問6 **C** にあてはまることばとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 漢字文化は変化し続け、ひらがなやカタカナが発生した

イ 真の漢字文化は、四世紀ごろまでの日本には存在しなかった

ウ 日本は八百万の神々によって、文字の精霊の害悪にさらされずに済んだ

エ 日本には文字文化が定着することなく、言霊の影響はますます強くなった

オ 古代ヤマト民族は、東アジアの国々と共通の文化を築き上げることとなった

問7 次の中から本文の内容に合うものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言霊を信じない今日において、邪馬台国を発見することは難しい。

イ 古代インドや西洋でも、文字を書く能力は社会的に重んじられた。

ウ 弥生時代には漢字の専門家が少なかったため、墓誌は書かれなかった。

エ ヒエログリフと漢字に対する迷信は、言霊を恐れるという点で同じである。

オ 漢字は権力者に必要とされなかったため、一般の人々にも定着することはなかった。

問

a

$$\frac{u}{b}$$

す

問
2

A

B

問

問
4

問
5

問
6

問 7 おじさんが、父親のように

問
1

a

b

問
2

問
3

A

B

問 4 人の思いを、

を超えて正確に伝える点。

問
5

--	--

だけが歴史であるということ。

問
6

7

問
7

[illegible]

25

くれたところ。

小計

小計

	合	計
--	---	---

受験番号

氏 名

受験番号は算用数字で横書きにすること